



フォトエッセイ『国境なき音楽紀行』

第2回 ザンジバル～風と海が伝える音楽、ターラブ～

日頃、音楽を通して人々と交流し、世界各地を旅することが多い。これら旅の印象と感動を、
フォトエッセイという形でほんの一端でも日本の皆さまにお届けできればと思う。

平井元喜



リスなどに統治され、かつては東西交易の中堅点として香辛料、象牙、金、奴隸貿易などを通じて栄えたターラブの音楽様式や楽器編成にはアフリカ・ペルシャ、ヨーロッパ、インド、インドネシアなどの文化が凝縮されている。ザンジバルは、繁栄した時代から現在まで、多民族が共存する複雑な構造を保つたままでいる。

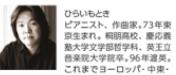
人種・言語・宗教の壁を超えて、音楽は人の心に直接響く。そして、世界に国境をも存続しない。この信念を胸に旅は続く。



魚村の老婆と幼子

この学校でさまざまな民族楽器を弾いた。私の奏る音に合わせて先生や生徒が踊りだし、自分たちの樂器を持つときは即興で弾き始め、新たなジムセッションが始まる。次々と生まれる音楽は必要ない笑顔とバランス感覚だけだ。ターラブとはアラビア語の「タリバ」(=興奮させる)だ。感動させるから派生した言葉だそうだ。全身が震え、生ききた音楽に虜になった。

これまでヨーロッパ、中南米、アフリカ、東南アジア各地で演奏を行って来たが、アフリカではターラブが最も人気がある。2015年は、ラ・フル・ジョルヌ、紀尾井ホール等のほか、カナダ、中国、セガラ、米国、トルコ、イギリスなど演奏する。音楽を通じて世界中の人民が交流する。2月には被災地や貧困地帯で開催コンサートを続ける。07年よりプロジェクト日本の義援金を世界へ(既読)、音楽・映像のコラボレーションによる芸術監修演出として創作、NHK文化センターや劇場等で上演。2月には、由C.NHK、アレクセイ・モロジン監修による「歌のメロディア」が開幕。日本語の歌詞が歌われる。アフリカ演歌も含む。ロンドン在住。



ひらいもと
ピアニスト、音楽家。刀根美里子、刀根重美の娘。昭和西校、東洋音楽大学文芸部芸術科、英王立音楽院卒業。96年退院。



ヴァイオリンでターラブを彈くと別の樂器に聞こえてくる。西洋音楽の12音にはない微妙な音程が耳に心地よい



ザンジバルでの唯一のグランピアノ。象牙健難のあちこちが割れていた。海から吹き込む風は、私の音楽をどこか運んでゆくのだろうか



前号で綴ったタンザニア

での公演の後、セントラル15分ほど沖合のインド洋に浮かぶ島、ザンジバルへと飛んだ。島の片側の高級ソートには美しい珊瑚礁や果てしなく広がる白砂浜に魅せられたターラブ商人が多く集う。島人ら欧米人が多く集う、世界遺産にも登録される旧市街ストリート、タウンはラビアンナイドしながらの迷路のようで、現地でもアラビア商人、インド商人が暮らし、エキゾチックな香氣を漂わせている。この

街は、東アフリカ沿岸に広がるスワヒリ文化の代表音楽ターラブの中心でもある。タンザニア日本大使館にて見学しただけ、伝統音楽を教えるダウ諸国楽院(Dhow Musicians Music Academy)を訪ねた。

明や躍り、太鼓など多様な民族楽器が合はさった音楽ターラブの発展は、ザンジバルの歴史と深く結びついている。ザンジバルは1964年にタンザニアに併合されるまで、大航海時代のポルトガル、その後オマーン、イギ



海藻を植える海女。行き来がミレーの「落葉拾い」を思わせる



貧しい農村の学校。子どもたちは明るく、生命感にあふれていた



音楽は写真左から、ラ・フル・ジョルヌ(アフリカの太鼓)、ウード(リュートや琵琶の弦)、ヴィオラ・ン、カスーン(ティター(太鼓)や自分の1音目で歌)である。地域により、タラ(ライド(太鼓)、チロ、アコディオン、木琴、笛、タショロ(日本の太鼓)等)を使いターラブの楽曲がある。歌詞は、スワヒリ語でう



タンザニアでは太鼓全般を「ゴマ」と呼ぶ。また、東アフリカの伝統芸能で太鼓中心の踊り、歌、祝詞、儀式のこととも「ゴマ」という